

唐風和月——阿倍仲麻呂と唐詩人の交友関係

北京外国語大学・日本学研究センター 趙雪

奈良時代の遣唐留学生である阿倍仲麻呂の事績が、『続日本紀』、『続日本後紀』、『日本文徳天皇実録』などに出ており、『続日本紀』に「わが朝の学生にして名を唐国にあげる者は、ただ大臣（吉備真備）および朝衡の二人のみ」と賞されている。そして、仲麻呂は長安（今の西安）に到着すると、『唐書列伝』には、「慕中国之風因留不去、改姓名為朝衡」（中国風に慕って、名前を「朝衡」「晁衡」と改めた）とあり、渡唐して約半世紀、唐王朝に務め、玄宗皇帝の愛顧を受けて順調に昇進を重ねた。仲麻呂は半世紀余り唐朝に仕え、王維、李白、儲光儀など唐を代表する一流詩人と親交を持ち、唐詩人と交友関係があったことを示した詩が残された。中国の勅撰漢詩集としての『全唐詩』には、阿倍仲麻呂に関わる五例の唐詩が見出され、その中には、仲麻呂自ら詠んだ一首も含まれる。本稿は『全唐詩』にある仲麻呂関連の詩を含めて取り上げ、1200年前にさかのぼって中日交流の一端をうかがってみたいと思う。